

地域と連携した教育の充実

—大学・学部と附属養護学校の連携を中心に—

佐伯 恵子*・永田 憲行*・谷口 紘八**

Improving School Education for Disabled children in Cooperation with Local community : Focusing on Cooperation between the Faculty of Education, Kumamoto University, and the Attached School for Mentally Handicapped Children

Keiko SAEKI, Noriyuki NAGATA and Kouhachi TANIGUCHI

はじめに

本校では、「共に育む教育を求めて」のテーマを掲げ、保護者をはじめ各方面の専門家等の多くの関係者と共に児童生徒の成長・発達を支援していくこと、また、児童生徒を取り巻く地域社会と共に、支援のネットワークを整えていくことを基本姿勢として研究を推進してきた。「共に育む」とは、障害のある児童生徒を中心に据え、学校・家庭・地域が連携してよりよい教育を求めていくものである。

近年、養護学校は地域における障害のある子どもの教育の中核的機関として機能することが必要であり、地域の小・中学校等への教育的支援を積極的に行うことで、地域の特別支援教育のセンターとしての役割を果たすことが求められるようになってきた。そこで、本校は、この「共に育む」視点をさらに進め、その対象を本校の児童生徒だけでなく地域の知的障害児者をも視野に入れた実践研究を行っている。

この「共に育む」仲間として、大学教官や学生も重要な役割を担うものであると考えている。ここでのいう大学教官・学生とは養護学校と関わりの深い障害児教育関係だけでなく、教育学部及び大学全体との連携を視野に入れたものである。

大学・学部と連携した取組について

本校は大学キャンパスと隣接しており大学教官や学生が来校しやすい環境にある。この好条件を活かして様々な取組を行っている。

1. 大学の授業への参加

大学の授業への参加というと、これまでは障害



写真1 中学部生徒の授業参加

児教育についての講話や教育実習・介護等体験の事前指導としての本校教官の参加が主であった。新しい取組として平成14年度より本校の中学部および高等部の生徒が学部の授業へ参加するようになった。高等部生徒は教育学部の「総合演習」、中学部生徒は障害児教育（学部生および特別専攻科）の講義に参加した。校内で介護等体験や教育実習として接するのと違い、大学の教室での授業ということもあり、学部・本校双方にとって新しい体験・発見のできる有意義な活動であったと評価された。

2. 本校の授業への参加

本校では附属学校として教育実習や介護等体験が行われている。ここでは教育実習や介護等体験とは別に大学・学部と連携して実施している学習活動について紹介する。

(1) チャレンジ学習

本校の総合的な学習の時間である「チャレンジ学習」に、多くの大学生や教官が授業の協力

* 附属養護学校

** 生涯スポーツ福祉

者として参加してしている。「チャレンジ学習」とは、余暇につながる内容や、一人一人の興味・関心に基づく課題を自ら選択し、自ら課題

表1 チャレンジ学習への参加例

学部	コース名	協力者の所属
中・高	エンジョイ ミュージック	音楽科
中	器楽	熊大フィル ロック研究会
中	おもしろ科学	理科
高	コンピュータ	技術科
中	身近な英語	英語科、障害児教育 外国人留学生



写真2 中学部「器楽」



写真3 中学部「身近な英語」

の追及を行うもので、中学部・高等部で実施している。生徒は中・高の学部ごとに選択した4～6のコースに分かれて活動する。この「チャレンジ学習」には、大学をはじめ地域の方々にも参加・協力いただき、それぞれのコースで特技や専門性を活かしてもらっている。

大学からの参加・協力の機会が多いのは音楽や外国語に関するコースである。より専門的な演奏や実際の外国の文化や言語に触れあうことができるので、コースを選択した生徒にも担当教師にも有意義で内容の濃い学習となっている。

(2) 生活単元学習、他

生活上の課題や目標の達成に向かって学習活動を組織する生活単元学習では、単元の内容によって大学からの参加・協力をお願いしている。ここでも、大学教官・学生の専門性を活かした本校の授業への協力が得られている。

この他に、国語・算数（数学）でのコンピュータを活用した学習、中学部の「朝の体育」、高等部の作業学習の「縫工班」など、様々な指導形態の学習でも、専門性を活かした参加・協力をいただいている。

(3) ようこそ附養へ

平成14年度より「ようこそ附養へ」という取組を始めた。これは本校の全校朝会の時間に教育学部の教官にそれぞれの専門性を活かした児童生徒向けの発表をしてもらうものである。

平成14年度は、音楽科教官によるバイオリン演奏や太鼓の演奏、手作り楽器の紹介やコーラス、保健体育科や生涯スポーツ福祉課程の教官

表2 生活単元学習への参加例

学部	単元名	協力者の所属
小	黒髪の名人さん お菓子作り、科学実験 遊びなどのグループ別 活動	音楽科、理科 家庭科、美術科 生涯スポーツ福祉 他
高	運動会 赤・白の応援マスコット パネル作り	総合演習として 障害児教育教官
高	料理の鉄人 麺類対決に参加	家庭科

表3 平成14年度「ようこそ附養へ」

期日	内容	所属
6/10	バイオリンと手作り楽器の演奏	音楽
6/17	ダンス, 長縄跳び	体育 生涯スポーツ福祉
6/24	柔道	体育, 柔道部
7/8	中国の楽器の紹介とダンス	教育
9/30	うた, コーラス	音楽
10/28	フライングディスク	生涯スポーツ福祉
11/25	うた, コーラス	音楽
12/9	トランポリン	体育
12/16	剣道と長刀	生涯スポーツ福祉 剣道部
2/17	太鼓と手作り楽器	音楽



写真5 ようこそ附養へ：剣道と長刀

は、前期までに音楽、体育、理科からの参加があった。

毎回、専門性の高い内容を本校の児童生徒にわかりやすく伝えるための工夫が凝らされており、楽しい時間となっている。

(4) 「ようこそ附養へ」参加者のアンケートより「ようこそ附養へ」の参加者へのアンケートを行ったところ、以下のような回答であった。

アンケートは平成14年12月に実施した。回答者の内訳は表4のとおりである。所属については教育学部の各課程・学科が主であるが、工学部からの参加もあった。これは、体育科の教官とともに参加した大学の柔道部・剣道部の部員である。

表4 アンケート回答者

回答者	教官 7	学生 55	
所属	生涯スポーツ福祉	23	
	保健体育	12	音楽 14
	教育	2	技術 1
	理科	1	養護教諭 1
	小学校	1	工学部 1



写真4 ようこそ附養へ：音楽科より

による柔道、剣道、トランポリン、フライングディスクの実演、創作ダンスや長縄飛びの披露など、多数の学生・院生とともに楽しい発表が行われた。児童生徒も真剣な表情で演奏・演技に見入ったり、一緒に歌ったり踊ったり、体を動かして楽しそうに参加していた。平成15年度

Q1：これまでに本校においていただいたことはありましたか？

これまで、授業や行事、ボランティアなど様々な活動を通して来校の経験があり、はじめての来校者は少なかった。教官は入学式・卒業式・すずかけ祭り

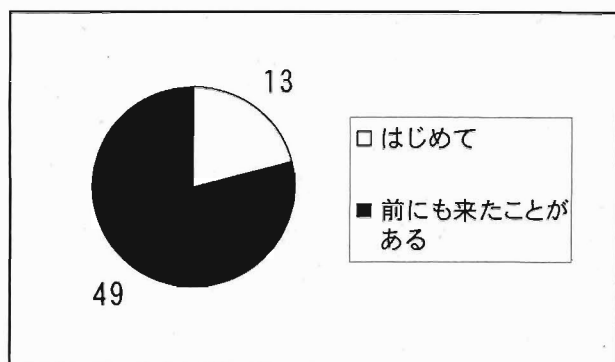


図1 Q1: 来校の経験について

表5 Q1: 来校者内訳

前にも来たことがある 49	
教官	授業 すずかけ祭り 入学式 卒業式 介護等体験
学生	介護等体験 夏休みのプール監視 スペシャルオリンピックス 剣道の試合 授業

等の本校の行事への参加経験が多かった。学生は介護等体験での来校が多かったが、他にも本校を会場として行われるスペシャルオリンピックスのボランティアとしての参加や夏休みのプール監視など積極的に障害児者とのかかわりの経験のある者もいた。

Q2: 「ようこそ附養へ」で本校へ来られて、学校や児童生徒への印象は変わりましたか？

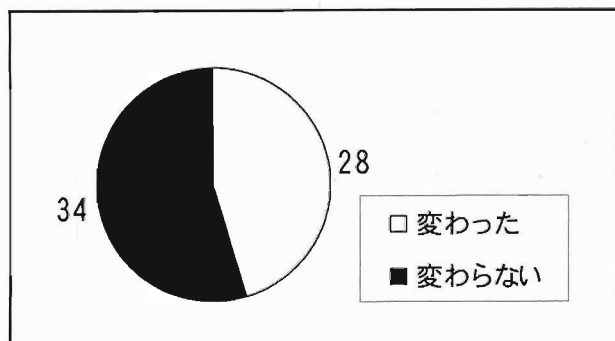


図2 Q2: 学校や児童生徒の印象

「ようこそ附養へ」が、はじめての来校の機会であったという者に印象が変わったという回答が多かった。障害者や養護学校への理解という点では、やはり実際に児童生徒と接する機会を持つことが大

切であると考えられた。

表6 Q2: 学校や児童生徒の印象

附養の印象	
変わった	・思っていた以上に熱心に見たり聴いたりしてくれた ・元気で明るかった
変わらない	・以前から知っていたので

Q3: 「ようこそ附養へ」の取組へのご意見・ご感想をお聞かせ下さい。

- ・とてもよい取組。学生にとってもよい経験。
- ・楽しかった。
- ・いろいろな人と交流できて良い。
- ・お互いにいい勉強、いい刺激になる。
- ・もう少し一緒に活動する時間が欲しかった。
- ・機会があればまた行きたい。
- ・これからも続けて欲しい。
- ・他の学部やサークルのも広げていってはどうか。

Q4: これからの学部と本校の連携について、ご意見をお聞かせ下さい。

- ・連携の在り方としてヒントとなる取組である。
- ・教官の持っている専門性を役立てて欲しい。
- ・附養の児童生徒も大学に来て欲しい。
- ・お互いの知らないことに気づいて欲しい。
- ・もっと機会を増やして積極的に交流すると良い。
- ・養護学校を身近に感じられるようになった。
- ・他学部とも連携してより多くの分野の専門活動を提供すると良い。

Q3およびQ4は感想・意見を尋ねたものである。大学と附属養護学校が連携していくということへの積極的な意見・肯定的な意見が多かった。また、「ようこそ附養へ」が、全校朝会という限られた時間での活動であったので、児童生徒とのかかわりの時間に物足りなさを感じたという感想も多かった。しかし、「ようこそ附養へ」の参加をきっかけとして、前記の本校の授業（「チャレンジ学習」等）の協力者となったり、PTAサークルへのボランティアとして参加するようになった学生もいる。また、大学教官にも研究協力者として授業づくりに参加していただいている。これからも様々な取組の中で連携を深めて行きたいと考える。

3. 熊大附養教育・研究協力者会議と熊大附養総合支援研究会

平成9年に発足した「熊大附養教育・研究協力者会議」は、「共に育む教育」の充実をめざして、大学や福祉・労働・医療関係者等、そして家庭との密接な連携を図り、その意向を学校運営や教育研究活動に反映させるために組織化したものである。これまで、学校への意見を求めたり、研修の機会を設けたり、グループ別の課題研究等も進めてきた。

平成15年度より、地域における養護学校のセンター的役割の追究という視点から、この協力者会議を発展的に改編し「熊大附養総合支援研究会」としての活動に取り組んでいる。これは、地域の中で養護学校に求められる特別支援教育のセンター的な役割を積極的に果たすことを意図し、本校の附属学校としての特質を活かし、大学や地域と連携を図りながら、障害児者や地域住民のニーズに応えるさまざまな支援・サービス活動を行う「熊大附養総合支援事業」を推進する組織である。

ここでは、これまでの取組の中からいくつかを紹介する。

(1) 教育実践研究

本校の研究テーマのもとに課題別の研究グループに分かれて教育実践研究を行ってきた。

「教育課程の改善」「個別の指導計画の充実」「情報教育の推進」「総合的な学習の時間ーチャレンジ学習の検討」「総合的な学習の時間ー進路の学習の検討」等である。

(2) 教材・教具開発

ソフトウェア開発を共同研究として行っている。これまで知的障害児用の時計の学習、絵や写真の弁別等の学習用ソフトウェア開発や情報携帯端末（PDA）を活用したコミュニケーション支援の研究等を行ってきた。

(3) 知的障害者のためのコンピュータ教室

平成13年度より、熊本大学の公開講座としてコンピュータ教室を実施している。年間約10回、月1回土曜日に開講している。講師は本校職員と教育学部教官・学生等が担当する。募集定員は10名であったが、平成14年度には定員を超える応募があった。さらに平成15年度は希望者が定員の3倍程になった。このため、より多くの希望者が参加できるように前・後期に分けて開講している。内容は、コンピュータの基本的操作、インターネット活用、ワープロソフトを使ったはがき等の作成、学習用ソフトウェアの体験などである。参加者は小学生から成人まで幅広い。皆、大変楽しみにして参加している。

学齢期の参加者は保護者の同伴の他に、学校の担任の参加もあり、在籍校でのコンピュータ活用への情報提供の役割も果たしている。

(4) ボランティア養成講座

平成15年度、熊本大学や近隣の大学生を対象として夏季休業中に3日間の日程で開催した。知的障害児者理解のための講義や子ども達との交流を行った。募集広報の開始と同時に問い合わせ、申し込みがあり、大学生の関心の高さを実感した。32名の参加があり、その中の多数の学生がボランティアバンクに登録した。

<主な講座内容>

「障害の理解のために」

教育学部障害児教育学科より

「障害児者のライフステージ 乳幼児期編」

元熊本市子どもの発達相談窓口統括療育相談員

「障害児者のライフステージ 学齢期編」

本校より

「障害児者のライフステージ 青年期編」

知的障害者授産施設より

「交流タイム」

夏休み学童保育事業での交流活動

「保護者と話そう」

養護学校保護者の本音トークを聞こう

他

(5) ボランティアバンク

平成15年度にスタートしたボランティアバンクとは、教育実習や介護等体験に参加した学生やボランティア講座受講者の中から希望者を登録し、ボランティアを必要とするところに紹介を行うものである。それぞれの学生の得意とする活動や協力可能な時間帯などを登録してもらっていることで、ニーズに応じた紹介が可能となっている。

<ボランティア紹介例>

- ・放課後のPTA活動である本校児童生徒を対象とした音楽サークルやテニスサークルに音楽科や体育会の学生が特技を活かして参加。
- ・熊本大学の公開講座「知的障害者のためのコンピュータ教室」の講師。
- ・生徒の下校や下校後の活動の支援。

おわりに

教員養成学部の附属学校は児童生徒への教育や教育実習に加えて、地域の教育に資する先駆的実践研究を行うことがその役割であり、この実践研究において学部との連携の推進が重要である。

本実践報告では、大学・学部と附属養護学校の連携に視点を置いた取組について述べてきた。このような取組に基づき、より良い教育実践を行うことが附属学校としての役割を果たしていくことにつながると考える。また、養護学校の教員の願いとしては、このような連携の取組をきっかけとして、大学教官をはじめ様々な活動に参加した多くの方々が、障害のある児童生徒への理解を深め、地域の中で支え合う協力者の一人となって欲しいと期待するものである。

参 考 文 献

- 1) 文部科学省，21世紀の特殊教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2001）：21世紀の特殊教育の在り方について（最終報告）
- 2) 文部科学省，特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議（2003）：今後の特別支援教育の在り方について（最終報告）
- 3) 熊本大学教育学部附属養護学校（1998）：研究紀要22 共に育む教育を求めて
- 4) 熊本大学教育学部附属養護学校（2000）：研究紀要23 共に育む教育を求めて
- 5) 熊本大学教育学部附属養護学校（2002）：研究紀要24 共に育む教育を求めて
- 6) 佐伯恵子（2002）：大学・学部と附属学校との共同研究について，日本教育大学協会会報第85号，5-6.
- 7) 佐伯恵子（2003）：地域と連携した教育の充実，日本教育大学協会研究集会発表概要集，105-106.
- 8) 佐伯恵子（2003）：地域支援のあり方「熊大附養総合支援事業」の取り組み，日本教育大学協会全国特殊教育部門合同研究集会滋賀大会要項，47-48.